

## 第14話 仏教の伝来

百濟から仏教が伝えられると、これを信じてよいか悪いかの意見の相違から、大臣の蘇我氏と大連の物部氏との間で一大争乱が起こり、ついに物部氏は蘇我氏のために滅ぼされた。

朝鮮の三国のうちで最もわが国に忠実でした百濟は、先に儒教という中国の学問を伝えて大いにわが国の文化を助けたが、欽明天皇の13年には、更にまた仏教という教えを伝えて来ました。

### 仏教の起こり

そもそもこの仏教は、今から2600年ほど前に印度に起きたもので、これを説きだしたのは釈迦という偉いお方でした。釈迦はもと迦毘羅城主の浄飯王の子として生まれ、太子となっていたのですが、つくづく人間の世の有様を見ると、年老いて弱くなっても働かねばならないような貧しい者もあれば、病気に罹って絶えず苦しんでいる者もいます。

一方で生まれて来るのを喜んでいるかと思えば、一方では忽ち死んで行くのを悲しんでいます。しかも、その50年か70年の短い一生を、誰も彼もが皆あくせくと働きながら悩み通しているのです。

なんという情けない、あさましい人間の一生であろう、と思うと、何とかしてもっと落ちついた、ゆったりした気持ちで万人が楽しく暮らせるようにしてやる事は出来ないものか、その道を見つけ出そうと思立たれたのであります。

それには、安閑として王城の中になどいたのではだめだ、広く世間に出て、物識りの人々に逢って教えを聞いたり、自分でも世の中の経験を積んで、その上で考えなければだめである。そこで妻も子も国も位も捨て、密かに王城を逃れ出で、坊さんとなって、荒野や山の中で思いを凝らし、心を練って、苦行すること六年の後に、やっと悟りを開いてひとつの道を見つけました。

それは、人間が常に苦しむ本は、皆、欲の一念から起こるのであるから、先づ此の欲を抑えて、気を静かに、心を平らかに保つことが大切である。自分の欲を抑え、自分の欲を滅ぼして、他人の為を圖って行くところに人間の本当の務めがあるので、そういう心持になれた人が即ち仏である。人間が皆自分の欲を抑え、滅ぼして、仏になれば、世の中は全く平和になって行く、というのであります。

釈迦はこの教えを説くと同時に、自分で実際に行ったので、忽ち人々から尊敬されて、その教えを聞く者が四方八方から集まって来るようになり、ここに仏の道、即ち仏教が生まれたのです。仏教は初め印度に広まって、後、中国に伝わり、更に朝鮮に入って来たのですが、わが国には、前にも述べたように、欽明天皇の13年に百濟から始めて伝えられました(訳注:538年 欽明に仏教伝来ごみやさん)。

### 仏教伝わる

## 第14話 仏教の伝来

その時、百済の王は使いを以って釈迦仏の金銅像一体と経文を献上し、それに手紙を添えて、「仏教は諸法のうちで最もすぐれた教えで、遠く印度から三韓に至るまでの諸国が皆尊敬して居りますから、謹んで日本国にもお伝え申します」と、大いに仏の功德を称揚て来たのでした。

欽明天皇はこれをお受けになると、非常にお喜びになって、使いの者に、「朕はまだこのような微妙な教えを聞いたことが無かった」とまで仰せられた。しかし、これを信仰すべきかどうかという事は、御自分ではお決めにならずに、群臣を集めてお尋ねになりました。何より国家の一大事とおぼしめすような事の起こった時には、群臣の意見を重んぜられて、これを尋ねるのが、わが皇室の高天原以来のご方針であったからです。

### 信仰して良いか悪いか

さて、天皇から上記のお尋ねがあると、大臣の蘇我稲目は、「西の諸国で既に信仰しておりますものを、日本だけが信仰してならないという事はございますまい」とお答えしましたが、大連の物部尾輿と、中臣鎌子とは、「わが国には昔から春秋四季にお祭り申している天地の神々があります。それなのに、今若し外国の神を拝まれたならば、恐らくは日本の神々のお怒りを受けらるべきであります」と反対のお答えをしました。中臣氏は代々、神を祭る役をしている家ですから、これが反対したのは当然の事で、又、物部氏は可美眞手命の子孫で、神武天皇の大和奠都以来、部下を率いて皇室を守護する役をしている武臣の家ですから、どうしても頑固で、昔のしきたりを守ろうとした傾きもあつたでしょう。これに反して、蘇我氏は竹内宿禰の子孫で、もともと文官ですから、既にこれまでもたびたび朝鮮の諸国との交渉にも当たったりして、自然と進歩した考えを持っていたのであります。

ともかくも斯うして意見が二つに分かれたので、天皇は中を取られて、「然らば、仏像は望む者に授けて、試みに祭らして見よう」と稲目にそれを賜りました。

### わが国に於ける最初の仏寺

稲目は跪いてお受けして大いに喜び、小墾田の自分の家に安置して礼拝していましたが、やがて向原の家を寺としてそこに移した。これがわが国における最初の仏寺であると伝えられています。

すると間もなく国内に伝染病が流行して、忽ちに死ぬ者が多く、その数は日増しに多くなるばかりでした。仏教の礼拝に反対した尾輿や鎌子がどうしてこれを黙って見てみましょう！二人は天皇に、「このように伝染病が流行するのは、外国の神を拝む者があるもので、わが国の神々がお怒りになったのに相違ありません。早く仏像をお棄てさせになって、神々の御心をお宥めになるのがよろしゅうございます」と申し上げた。

欽明天皇はこれを尤もおぼしめして、乃ち役人に命じて、仏像を難波(大阪府)の堀江に投げ棄てさせられ、向原の寺は焼き払わされた。

### 蘇我氏と物部氏との争乱

## 第14話 仏教の伝来

蘇我氏と物部氏とはこれから一層不和になったが、次の第30代敏達天皇の御代になり、**稲目の子の馬子**が大臣となり、**尾輿の子の守屋**が大連になるに至って、その争いはよいよ烈しくなった。

彼等もまた**仏教**に対する**考**えがその親達と全く同じで、**守屋**はこれを嫌って排斥し、**馬子**はその**反対**で、深くこれを信じていたので、どうかして**仏像**を手に入れて**祭り**たいと思っていた。

すると、ある年に百済に行ったわが国の使者が**仏像**を持って帰って来ました。**馬子**はそれを貰って大いに喜んで、寺を建てて**祀**りました。そして高句麗の僧の**惠便**という者が、播磨の国（兵庫県）にいたのを招いて師として、更に三人の女性を尼として**仏**を**拝**ませました。

ところが、不思議なことにこの時もまた**伝染病**が流行り出して、多くの者が死んだ。待ち構えていた**守屋**は、**中臣鎌子**の子の**勝海**と共に**宮中**に参って、「なぜわたくし共の**申し上げる**事をお用いにならないのですか？ かように二代も続いて**伝染病**が流行して、人々が**殆ど死に絶えよう**としているのは、全く**蘇我氏**が**仏法**を信じているからではありませんか」と**申し上げた**。

**敏達天皇**も尤もとおぼしめしたので、すぐに**詔**を下して**仏教**を禁ぜしめられた。それで、**守屋**は自分で**馬子**の寺に行き**指図**をして、**塔**を切り倒させ、**火**を放って寺をも**仏像**をも**焼き払**わせ、**焼け残**った**仏像**は**難波の堀江**へ棄てさせた。のみならず、**馬子**や**仏教**を信じた他の者らを**罵り辱**めて、更に三人の尼の**衣**を脱がせて、**縛り上げて**、**大勢の前**で**鞭打**った。**詔**を**笠**に着た**守屋**のこの**乱暴**を**馬子**が**心中**大いに**憤**ったであろうことは**容易**に**想像**出来ます。

間もなく**天皇**もこの**伝染病**にお罹りになり、**馬子**も罹った。**病気**は**天然痘**の類であつたらしく、罹った者は**体**が**焼**けるように**熱**くて**堪**えられなかったので、**泣き嘆**きながら**死**んで行く者が多かつた。**世間**では、**仏像**を**焼**いた**祟**りであろうと**噂**を立てた。

三月ほど経っても**馬子**はよくならなかつたので、**天皇**に、「私の**病気**は**仏**の**力**に頼らなければ**逆**も癒り**そう**にありません」と**申し上げて**、**仏**を**祭**ることを許して下さるようにと願いました。**天皇**は、「それなら、お前**独**りで**仏法**を行うがよい。他の者に**勸**めてはならないぞ」と仰せられて、三人の尼を**馬子**に還しておやりになりました。

**馬子**は大いに喜んで、三人の尼を迎え、新たに寺を造って**仏**を**拝**ませました。そのおかげか、**馬子**の**病気**は次第に**快方**に赴いたが、**敏達天皇**のご**病気**はだんだん**お悪**くなり、それから二月の後について**お崩**れになりました。

### 神の怒りと仏の祟り

同じひとつの**伝染病**流行という事でも、**仏教**を排斥する者はこれを**神々**の**怒**りであると言い、**仏教**を信ずる者は**仏像**を**焼**いた**祟**りであるというように、見る者の**立場**が違えば**考**え方も異なる。**要**するに、**両方**共に**間違**っていたのですが、そういう事のうちに、**蘇我氏**と**物部氏**との**争**いはますます烈しく、**深刻**になって行き、つぎの**用明天皇**の御代に、ついに**大事**となって**現**れた。

第31代**用明天皇**は、**御母**が**蘇我稲目**の娘で、恐らくは**仏教**の信者でしたからでしょう、わが国の

## 第14話 仏教の伝来

かみ みち どうと あつ しん そくい びょうき  
神の道をも 尊ばれたが、又、仏教を篤くお信じになっていましたので、ご即位二年の夏、ふと御病気に  
かか ぐんしん わし ほとけ たよ おも たち そうだん  
お罹りになると、群臣に、「朕は 仏に頼ろうと思うが、どうであろうか？ お前達でよく相談してみ  
くれ」と仰せられました。

おおむらじ もりや なかとみ かつみ みことり たが そむ おが  
大連の守屋と中臣の勝海とは 詔に違つて、「どうしてわが国の神に背いて、外国の神を拝まれる  
わけ ありましょ！ とんでもない事です」と言つて反対したが、大臣の馬子は、「天皇の仰せに 随  
う のが臣下の道である。それに背くという法はない」と言つて豊国法師という坊さんを連れて御殿の奥へ  
はい 入つて行きました。

うしろ なら おお おこ やくにん  
守屋がその後を睨んで大いに怒つていますと、そこに役人の一人があわてて出て来て、そつと守屋  
ささや みな そうだん かえ みち う と  
に 囁いた。「今、皆さんが相談して、あなたをお帰り路で討ち取ろうとしていますぞ」と。

おどろ へい あつ なかとみのかつみ  
守屋は驚いて、あわてて自分の家に帰つて兵を集めました。 中臣勝海も自分の家に兵を集めて守  
たす かつみ ま とみのいちい ころ  
屋を助けようとしたが、勝海は間もなく迹見赤橋という者のために殺されました。 ついで馬子も兵  
みずか まも すなわ おおおみ おおむらじ たが じぶん やしき たてこも おおむらじ たたか  
を集めて自ら守つた。 即ち、蘇我の大臣と物部の大連とが互いに自分の屋敷に立籠つて、今にも戦  
はじ なら あ  
いを始めそうな睨み合いとなつたのであります。

みやこ ないがい たいへん さわ びょうちゅう みこころ なや こと なん  
都の内外はさぞ大変な騒ぎとなり、御病中の用明天皇は御心を悩まされた事でしょう。 何とい  
ふちゅう ひとたち さわ へいゆ ほとけ いの  
う不忠な人達であろう。 この騒ぎの中で天皇は平癒を 仏に祈らせられたが、そのかいもなく、ついに  
かく  
お崩れになってしまいました。

### 物部氏が滅ぶ

まえ くらい あなほべのおうじ しい  
すると馬子は、守屋が前から御位におつけしようとしていた穴穂部皇子の宮に兵をやつて、皇子を殺  
みづか たいぐん ひき せ ぐん つよ  
させてから、自ら大軍を率いて守屋の家を攻めました。 ところが、守屋の軍はなかなか強くて、馬子  
ぐんぜい おいかえ  
の軍勢は三度まで追返されました。

しょうとくたいし おんとし ぐん したが とて ひととお か  
この時、聖徳太子は御年わずかに15歳で、馬子の軍に随つておられたが、逆も一通りでは勝てそ  
らん のを ご覧になると、仏に祈つて勝とうと、白膠木で手早く四天王の像を作り、頭にそれを 戴  
いて、「今若し敵に勝たせて下されば、きっと四天王の御為に寺を建てましょう」と誓われた。 馬子もま  
も てき してんのう ため てら た ちか  
た、「勝たせて下されば、寺を建て、仏教を弘めましょう」と誓いを立てた。

のち へい はげ たたか えのき い よせて なや  
さて後、兵を励まして戦つた時に、その時まで大きな榎の木の上からさんざんに射て、寄手を悩ま  
おむらじ とみのいちい い お お にわ やぶ ぞく  
していた大連の守屋を、迹見赤橋が射て木から落としたので、物部氏の軍は俄かに敗れて、その一族は  
ことごと ほろ  
ここで 悉く滅びてしまいました。

こ ぶつきょう はんたい ものべ まった ほろ なかとみ かつみ ころ しんこう  
斯うして 仏教に反対していた物部氏が 全く滅び、中臣氏も勝海が殺されてしまつてからは、信仰す  
ひさ もんだい もちろん しん とも たたか  
べきかどうか久しく問題となつていた仏教は、勿論、信じてよいこととなりましたが、それと共に、戦  
か そが いきお きゆう おお さか いっか むどう ようや はじ  
いに勝つた蘇我氏の勢いが 急に大いに盛んになり、この一家の無道がこれから 漸く始まりました。

### 蘇我氏の無道

たたか のち ようめい おとうと た すしゅん そくい  
この戦いの後に、用明天皇の御弟がお立ちになって、第32代崇峻天皇となられたが、その御即位

## 第14話 仏教の伝来

の五年に、馬子は彼の我まを崇峻天皇が憎まれているという事を聞くと、密かに家来の東漢駒という者に命じて天皇を殺し奉りました。

誠に驚くべき無道な行いです。東漢駒は帰化人の子孫ですから、或いはそれを大した悪事とも思わないで、馬子の命令に従ったのでしょうか。しかも馬子は、自分では全く知らなかったもののように、後で東漢駒の大逆の罪を責めて、これを殺して、自分の不臣の跡をくらましたのであります。

(第14話 仏教の伝来 終わり。 次は前頁に戻り、第15話 聖徳太子の摂政 へ)